

中欧公演

# 神樂

祈りと祝い

東北に息づく神楽の伝統





ハンガリーと日本・ポーランドと日本は、2019年に、外交関係樹立150周年・国交樹立100周年を迎えた。記念すべきこの節目を祝して、国際交流基金は、これまで本格的に紹介される機会のなかった「神楽」の文化をご紹介すべく、神楽中欧公演「祈りと祝い—東北に息づく神楽の伝統—」を開催しました。

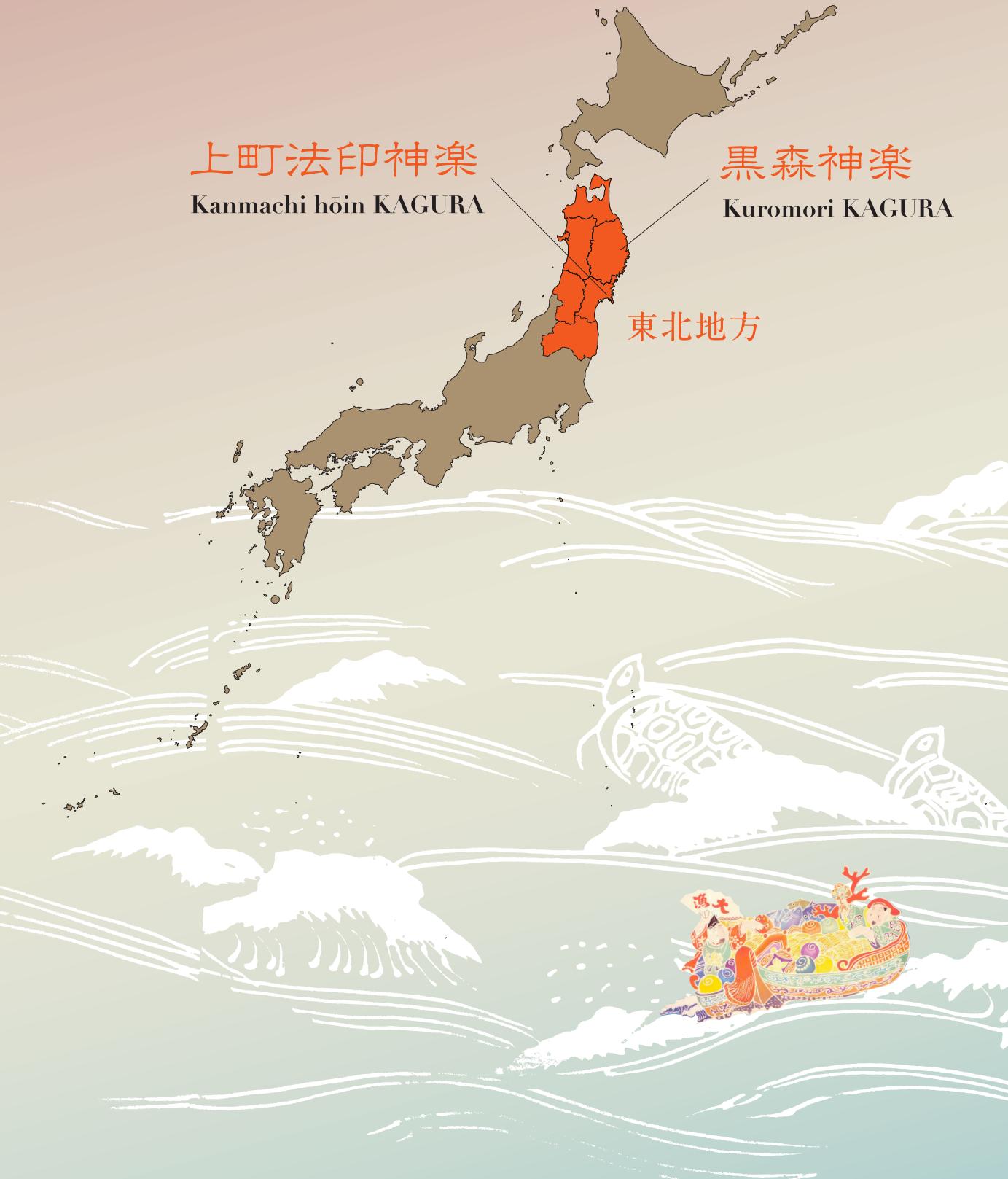
神楽は、能や歌舞伎の祖のひとつとも考えられ、時代を越えて受け継がれる民俗芸能です。地域社会に根ざし、そこに住む人々の暮らしの一部として愛され、受け継がれています。神楽は日本の各地で伝承されていますが、今回はその中でも、地域社会や人の営みとの関係性が強い、東北地方の神楽に焦点をあてます。

2011年に起きた東日本大震災以後、人々を支え、地域コミュニティの絆を保ち、復興の活力ともなったことで、神楽の社会的役割や価値に改めて注目が集まっています。震災に際してはポーランドを含む世界各国からの温かい支援が寄せられました。たくましく復興を遂げつつある東北の姿と、復興に向かう人々を慰め、励まし続ける神楽を、交流150周年・100周年の機会に、ハンガリーとポーランドの皆さんにご覧頂き、記念すべき節目をともにお祝いできることを嬉しく思います。

公演の関連情報として、神楽とは、東北地方とは、そして公演に出演する神楽団の地元での活動の様子などをご紹介するとともに、ハンガリーとポーランドでの公演と交流の様子もご紹介します。

# JAPONIA

## 地理 東北地方



かんまちほういんかぐら くろもりかぐら  
上町法印神楽、黒森神楽というふたつの神楽は、共に日本の東北地方という地域に根ざした芸能です。東北地方は日本国土の北東に位置し、人口は約880万人、面積は約67,000平方キロメートルです。その中に6つの県があり、上町法印神楽は宮城県登米市、黒森神楽は岩手県宮古市を、それぞれ発祥の地としています。

東北地方へのアクセスとして一般的なのは、新幹線です。東京から新幹線に乗ると、約1~4時間で東北地方の各都市へ着くことが出来ます。東北地方は、太平洋、日本海というふたつの海に面しており、海産物が豊富に獲れます。稲作や農作も盛んであり、国内有数の食料生産地として名高い地域です。また、気候的特徴として冬になると雪が積もることから、ウインターポーツや温泉なども楽しめています。東北地方の冬は雪と共に存する生活スタイルが求められます。

2011年3月11日に宮城県沖で発生したマグニチュード9.0の大地震では、東北地方、とりわけ岩手県、宮城県、福島県の太平洋側3県を中心に、甚大なる被害が発生しました。太平洋側の街々を襲った大津波、そして福島県第一原子力発電所の事故は、世界規模のニュースとして広く知れ渡ることになりました。しかし、東北地方の人々は、すぐに復興へ向けた活動を開始しました。その作業には膨大な労力が伴いますが、地震発生からわずか1ヶ月後には東北新幹線が全線で運行再開するなど、明るい兆しも見え始めました。

神楽は、人々の暮らしに息づく祈りの芸能です。大震災後の自肅ムードが高まる中、東北に暮らす人々は神楽を熱望し、神楽もまた、人々に寄り添い、復興への大きな支えとなりました。このことは、神楽をはじめとした地域芸能が、旧態依然の遺産ではなく、今を生きる人々にとって大きな意義をもつ文化財であることを再認識させる結果となりました。

# 神楽とは？



神楽には6つの要素があります。それは【神様】【迎える】【もてなす】【送り返す】【儀式】【芸能】です。【神様】とは、古来から日本人の生活に寄り添う大切な“存在”とされており、自然災害、病気、食糧難などの困難を和らげ、良縁、子宝、家族繁栄などの幸福をもたらす、多くの日本人の暮らしになくてはならない「人智を超えた存在」の総称です。日本では「八百万」という言葉があり、これは「数え切れない程のたくさんの中の神様」を意味します。そして、自分達の日々の生活が沢山の神様によって支えられていると考えられています。通常、神様は人間が住む世界とは異なる世界に住んでおり、また人間は神様の姿を目でとらえることが出来ません。しかし、多くの日本人は神様と対面し、神様から加護をうけることで、自らの人生をより良いものにしたいと考えています。その為に、まず神様を【迎える】ことを試みます。そして、迎えた神様を【もてなす】為に、様々なことを行います。神様に舞を披露したり、神様と一緒に踊ったり、神様に食べ物やお酒を振る舞ったりします。こうして、神様とコミュニケーションを図りながら、共に楽しい時間を過ごします。神様はもてなしをうけた御礼に、人々の願望、例えば、豊作、無病息災、地域繁栄、等々、が達成されるよう約束します。こうして、神様の祈りを授かった人間は、感謝の気持ちを込めて、神様を元の場所へ【送り返す】のです。これらの一連の流れを【儀式】として執り行うことを神楽と言います。

さらに神楽は、儀式であると同時に【芸能】でもあります。神楽は人々の暮らしにおける楽しみであり、娯楽的意味合いも多く含まれています。神聖な儀式として執り行われる神楽は、同時に人々の心を高揚させ、現代で言うエンターテインメント鑑賞のような一面も併せ持っています。神様と「共に楽しむ」という発想は、神楽など日本の民俗芸能の大きな特徴のひとつです。

2011年3月11日に宮城県沖で発生した大地震は、東北の人々の暮らしに甚大な被害を与え、かつその地に根ざす神楽にも大きな影響が及ぼしました。黒森神楽の活動地域は震災被災地と重なりますが、神楽衆全員と道具一式は奇跡的に難を逃れ、黒森神楽団は被災後いち早く活動を再開します。また、活動地域が内陸寄りだった上町法印神楽は、幸いにも津波被害から免れ、被害の大きかった沿岸地域で活動する他の法印神楽の支援を積極的に行いました。こうして神楽は、大震災による犠牲者の供養と共に、再び日常を取り戻そうとする被災者を激励し続けることで、東北の復興に多大な貢献をします。この活動は現在も継続されており、神楽が東北の暮らしに根付き、人々に寄り添い、人々を支える芸能であることが、改めて立証されました。これは神楽の「儀式と芸能の要素を併せ持つ」という特徴に加え、神楽という芸能が東北の地にしっかりと根付いていることが大きく関係しています。その土地ごとに様々な特色を持ち、それぞれの地域芸能として継承、発展してきた神楽は、その地域に暮らす人々の文化を知ろうとする際の「生きた教科書」と言えるのではないでしょうか。

## 上町法印神楽/概説



上町法印神楽は宮城県登米市豊里町上町にある稻荷神社を本拠地としています。【法印】というのは山伏の修験者のことです。そして【山伏】というのは、特別な力が宿ると言い伝えられる山中に籠もり、修行をする宗教従事者のことです。つまり法印神楽とは、その山伏によって伝承されてきた神楽を指します。【神社】とは、「神様が宿る場所」のこと。【稻荷】とは、稻を象徴する農耕の神様を指し、つまり稻荷神社とは「農耕の神様と会える場所」のことです。ちなみに稻荷神社というと日本人はキツネを思い浮かべます。稻荷神社にはキツネをシンボライズした農耕の神様がいると考えられているからです。上町法印神楽は、その稻荷神社の境内に木造舞台を設置し、そこに神様を招いて上演されます。近隣に住む人々は稻荷神社に集まり、そこで神様を迎え、もてなし、送り返すのです。起源からおよそ170年以上の歴史を誇る上町法印神楽は、今日では宮城県指定の無形民俗文化財に指定され、保存会の人々の手により、継承と普及が続けられています。

宮城県は2011年3月11日に発生した大地震により甚大な被害を受けました。幸いにも津波被害を免れた上町法印神楽は、隣町で活動する同系の法印神楽に用いる小道具を支援し、情報の収集を行うなど、地域芸能の復興に尽力しました。また、数ある東北の神楽団の中でも、若手から中堅の人材を中心とした活動により幅広い年齢層から親しまれるなど、地域の活性化にも貢献しています。

## 上町法印神楽/神楽舞台、吊り物など



◎大屋孝雄



上町法印神楽について、より詳しく知るために有益なキーワードをいくつかご紹介します。

それは【神楽舞台】【大乗飾り】【湯立神事】【手印】【反閑】などです。

上町法印神楽は、稲荷神社の境内に木造の【神楽舞台】を作り、そこで上演されます。この神楽舞台には、本舞台と、少し小さめの小舞台というふたつが設置されます。舞台は「しめ縄」と呼ばれる縄で四方を囲まれ、これによって神が降臨するエリアを規定する結界が作られます。また、この大舞台の上部に吊られる【大乗飾り】という和紙製の飾り物も、上町法印神楽の大きな特徴のひとつです。舞台上に登場する舞い手だけでなく、舞台セット全体や舞台上部の飾り物にもご注目下さい。大きく立派な大乗飾りから莊厳な雰囲気を感じ取れるかと思います。この大乗飾りに神様が集まつくると考えられています。装飾的に切られた和紙を神棚と呼ばれる祭壇などに飾る「キリコ」の習慣を持つ、宮城県の神楽ならではともいえるでしょう。【湯立神事】とは、大釜で熱湯を沸かし、その中に笹をくぐらせ、笹に付いた熱湯を舞台上やその周辺にふりかけることで、その場所を清める儀式を指し、夜神楽が始まる前に行われます。湯には悪いものを浄化する力があると考えられています。湯立神事の際には、面、装束、刀等の道具一式が舞台上に置かれ、神楽衆も全員舞台上に揃って正座し、神様を迎える準備を整えます。そして、舞における特徴としては、豊作や土地への感謝を祈願するまじないとして、ハンドサインのように手で形を作る【手印】や、足踏みをする【反閑】などが挙げられます。特に反閑は日本古来の芸能の基本動作と言われるもので、上町法印神楽が継承する反閑は文化的価値が高いと評されています。このように、良いことを祈り、悪いことを祓おうとする祈祷的な意味に加えて、上町法印神楽はもうひとつの意味を持っています。それは、お祈りをしてくれた神様をもてなししながら、一緒に楽しもうとすること、つまり娯楽的な意味です。大舞台の梁に上ったりぶら下がったりしてアクションシーンを演じるなど、勇壮な見どころが多くあります。剣を振り回すことは、悪いものを斬り外側へ追い払う意味も持ります。こうして、祈祷と娯楽の二面性を併せ持ち、神様をもてなし、最後には送り返すのです。また、神様だけでなく、神楽を鑑賞する観客を巻きこむインタラクティブな掛け合いも、上町法印神楽・黒森神楽とともに、大きな特色のひとつと言えるでしょう。ですから、神楽を鑑賞する際は、どうぞ積極的に神楽をお楽しみ下さい。そうすればきっと、神様が繁栄を運んで下さるはずです。



## 上町法印神楽/演目紹介

### 道祖 どうそ

日本の神話に登場する猿田彦という神様がモチーフになっています。道祖面と呼ばれる仮面をつけ、上町法印神楽における基本の舞と言われる『初矢』<sup>しょや</sup>とほぼ同じ装束をまとい、一人で舞います。反闊(足踏み)が多く、途中で米を撒いたり、日本古来の節回しで詞を唱えます。後半には地面に膝をすり、刀を左右に振り下ろしながら前へ進む所作があります。これは未開の地を自らが先頭となり、草木をなぎ払い、人々の歩むべき道を切り開いている様を表しています。『道祖』は、人間の生き方・生き様を先達する舞と言われ、そのタイプの舞として高い評価と人気を誇ります。新築祝い等で舞われることも多いです。



### 日本武尊 やまとたけるのみこと

日本古代史上の伝説的英雄である日本武尊がモチーフになっています。日本武尊に恨みを持つ悪鬼女が美しい姫の姿に化け、日本武尊に仇討ちを企てます。鬼女が日本神話において大変貴重な宝剣である天叢雲剣を奪い去ると、宝剣がないことに気が付いた日本武尊は怒り、大乱闘の末、鬼女を退治します。奪い返された宝剣は、再び大切に奉納されます。鬼女が宝剣を盗み取る場面で、美しい姫の姿に化けているにも関わらず、神の力を宿した鏡に鬼女の姿が写し出され、恐る恐る刀剣を盗む仕草は見どころのひとつとされています。身体の動きが速く荒々しい舞として有名で、視覚的にもバラエティに富み、観客に喜ばれる人気の高い演目です。

## 黒森神楽/概説



黒森神楽は岩手県宮古市山口地区の、標高約330メートル程の黒森山にある黒森神社を本拠地としています。宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、森林と海産物に恵まれた自然豊かな地域です。そして、黒森神社は漁業者を中心に信仰を集めている神社です。新年を迎えると、黒森神楽はその沿岸部の集落を訪れ、そこで神楽を舞い、そこに住む人々へ祝福を授けます。ここに上町法印神楽との特徴的な差違があります。人々がひとつの場所へ集い上演される上町法印神楽に対して、神楽団自らが個々の集落に出向いて上演する黒森神楽。神様に「会いに行く」スタイルと、神様が「出向く」スタイル。日本の神楽には多様なスタイルがあることを実感頂けると思います。また、黒森神楽が訪ね廻る地域は同タイプの他の神楽と比べても特例的に範囲が広く、約340年前に決められた範囲を現在も継承していることから、その価値を高く評価され、2006年には国の重要無形民俗文化財に指定されました。

2011年3月11日に発生した大地震により、黒森神楽の神楽衆のうち5名が津波の被害を受けました。しかし黒森神楽は、震災のわずか3ヶ月後には活動を再開し、犠牲者の追悼、津波被害で家を失った人々が住む仮設住宅への慰問、復興祈念公演など、精力的な活動を続けました。また、日本各地や諸外国で開催された震災復興・支援のイベントに招へいされ、被災地の現状を発信すると共に、震災支援への感謝の意を表してきました。人々の暮らしの中で祈祷や鎮魂を担い続けてきた黒森神楽だからこそ、被災地を代表する地域芸能として特に注目され、広く認知されてきた証でもあります。

# 黒森神楽/巡行、權現様、神楽幕など



黒森神楽について、より詳しく知るために有益なキーワードをいくつかご紹介します。それは【**權現様**】  
【**巡行**】【**神楽幕**】【**夜神樂**】などです。黒森神社には神様がいらっしゃいます。その神様の祝福を  
神社から離れた集落に住む人々へ届けるためには、神様に出張して頂かなければなりません。その  
際、神様が宿る器(容れ物)が【**權現様**】です。權現様の見た目は獅子の頭のような姿をしていま  
す。神様が宿っている時の權現様は、神様と同等なので、とても丁寧に扱わなければなりません。  
神社では、神様を權現様にお乗せする際にも、厳格な儀式を行います。こうして神様を乗せた權  
現様を携えて、神楽衆一行は岩手県湾岸部の集落を訪ね歩きます。これを【**巡行**】と呼びます。  
宮古市山口地区から北上する「北廻り」と、南下する「南廻り」というふたつのルートがあり、これを  
1年ごとに繰り返しています。集落に入る際の儀式を終えると、家々の庭先で權現舞という舞を踊り  
ます。權現舞は、悪いことを祓ったり、防火を祈ったり、家の安全、無病、豊作、大漁、安産などを  
願ったりして、人々に、様々な御利益をもたらします。家ごとに悩みが異なるので、各家のニーズに応  
えられるよう、神楽衆は様々な祈祷を用意しています。更に權現様が人々の肩や頭を噛むことで悪い  
ものを祓い、その人が1年間安全に暮らせると言い伝えられており、權現様は人々の生活を  
オールラウンドにサポートしてくれるのです。これらのことは太陽が高い昼の時間帯に行われます。そ  
して夜になると、黒森神楽はまた別の一面を見せることになります。ここに登場するのが【**神楽幕**】で  
す。神楽衆を集落に迎えるにあたって中心的な役割を担う民家を神楽宿と呼び、その家の座敷に  
張られます。これは一種の舞台装置の役割を持ち、神楽幕を張った部屋が【**夜神樂**】を舞うス  
テージとなります。黒森神楽は広範囲の地域を巡行するため、大掛かりな舞台装置を持ち歩くこと  
は出来ません。神楽幕、衣裳、太鼓、笛などの楽器といった比較的コンパクトな道具を用いて上演  
するスタイルになっています。また、この神楽幕は大漁を願って漁船に飾られる「大漁旗」と同じ工  
法で染色されており、大漁祈願の柄や神話の柄などいくつか種類があります。夜神楽は、打ち鳴ら  
しと呼ばれる神楽の始まりを告げる儀式から始まります。次に祈祷の意味が強い演目や、高貴な神  
様である天照大神をテーマにした演目などが踊られます。この他、笑いを誘う演目や、地域の生業  
に結びついた演目、物語仕立ての演目などで観客を楽しませます。これら夜神楽も、豊作や大漁な  
どその集落が安全で平和に暮らせる事を祈る舞であり、同時に観る人の心に安らぎを与え、人々  
を楽しませる芸能なのです。このように、黒森神楽を支えているのは、貴重な芸能を受け継いできた  
担い手である神楽衆であり、神楽宿を引き受け、神楽衆を受け入れている地域の人々です。彼ら  
の思いと陸中沿岸で伝承されている文化が結びつき、今日の黒森神楽があると言えます。



## 黒森神楽/演目紹介

### 打ち鳴らし

神楽宿で夜神楽を上演する際、最初に行う始まりの儀式です。神楽衆が幕を張った舞場に丸く座り、神座を設けます。太鼓、笛、手平鉦(てひらがね。両手ですり合わせるように鳴らす打楽器。その音色から通称「チャッパ」とも呼ばれる)の囃子に合わせ、打ち鳴らしの歌を歌います。これは、神を招くための「神下ろしの歌」であり、その歌の由来や神様の御利益などが歌われます。

### 神葉 さかきば

入門者が最初に習う黒森神楽の基礎とされる一人舞です。面は着けず、頭に鳥兜を被り、女物の襦袢にたすき掛けという身なりで、右手には白扇と錫杖(しゃくじょう。頭部に複数の輪が付いた仏僧が持つ杖)を、左手には榊幣束(さかきみてぐら。二本の和紙を木に結び神様へ捧げる道具)を持ちます。祈祷の意味を込めた舞であり、黒森神楽を受入れる家と地を祓い清め、祝福を祝い込めます。黒森神楽独特の激しい跳躍と回転を伴い、三足と呼ばれる呪術的な足踏みを繰り返します。舞の最後には、榊幣束を太鼓の胴に立て、権現様に向かって米をまき、酒を供えて礼拝します。



## まつむかえ 松迎

鳥帽子を被り、阿吽の面（あうん。元は仏教の呪文を意味し、ここでは口を開いた顔と口を閉じた顔が対となる面のこと）を着けた「千秋」と「万歳」という兄弟による二人舞で、門松（松や竹を用いた正月飾りのこと。家の門前などに飾る）を立てて新年を祝います。天下太平を祈願して松の枝に託した祝言を述べた後、面を外して、扇を用いて舞います。後半はテンポアップして盛り上がり、多数の演目を持つ黒森神楽においても花形の演目と評されます。舞手二人の息が合い、優雅で美しい舞が特徴的です。



## やま　かみまい 山の神舞

地域の生活と密着した「山の神」が登場する舞のため、多くの伝承や意味を持つ演目です。登場人物は山の神1人で、赤い面を着けています。山の神の由来を語り、山の恵みを与え、豊饒と多産を約束します。後半は赤い面を外して舞い、後に激しい躍躍と回転のシーンがあります。この神様は、山仕事や農耕を守護する神であると同時に、漁業者からの信仰も深く、また安産の神として女性からも崇められます。この舞を舞えるようになるには厳しい鍛錬が必要と言われ、黒森神楽にとって最も重要な祈祷の舞であり、必ず演じられる演目です。



## え び す ま い 恵比寿舞

別名「鯛釣り舞」。古来より漁業や商業の神として崇められる「恵比寿」という神様の面を着け、手に釣り竿を持ち、一人で舞います。釣り竿に針を付け、糸をたぐり、鯛を釣り上げ、とどめを刺すなど、それらの仕草を様々な技法で表現するため、観る者の喝采を浴びることが多く、特に漁業関係者の間では絶大な人気を誇ります。最も盛り上るのは鯛と恵比寿神との釣りバトル。地元での上演時は観客から干し鮭などが差し入れられ、本物の魚を釣り上げるという趣向もあります。全体的にゆったりとした動きが特徴的で、陸中沿岸地方に欠かすことのできない、大漁祈願と海上安全を祈祷する演目です。



## ごんげんまい 權現舞

權現様が神楽宿を出発する際の儀式です。權現様がカチカチと歯を鳴らし、周辺の悪いものを祓います。また、權現様に噛まることは、生活の安全や繁栄をお祈りする効果があると信じられています。權現様は、台所や台所用品を噛み、竈やガス台、ストーブなどの暖房器具などを噛み、それぞれの安全や防火を祈ります。神棚や仏壇と呼ばれる祭壇の前、家の中で縁起の良い場所とされる床の間の前などでも、權現様が歯を鳴らし、悪いものを祓います。次に、見守っていた宿の家族や参列者を權現様が噛む「身固め」みがたを行い、その身の安全を祈ります。一通りのお祈りが済むと、權現様は舞を見せ、後ずさりしながら家から出て行きます。本公演では、ご来場への感謝と日本とポーランド/ハンガリーとの益々の友好を祈って、權現様の舞と代表者への身固めをもって、幕を下ろします。

公演・交流の記録









## 中欧公演・交流の日程

### 交流セッション

2019年2月19日 映画・演劇大学(ブダペスト/ハンガリー)

2019年2月22日 ワルシャワ工科大学(ワルシャワ/ポーランド)

### 公演

2019年2月20日 ヨージェフ・アッティラ劇場(ブダペスト/ハンガリー)

2019年2月23日 ポルスキ劇場(ワルシャワ/ポーランド)

2019年2月26日 シェークスピア劇場(グダンスク/ポーランド)

### 関連映画『廻り神楽』上映

2019年2月7日 エレクトロニク映画館(ワルシャワ/ポーランド)

2019年2月15日 ザメク文化センター(ポズナン/ポーランド)





主催 国際交流基金  
共催 在ポーランド日本国大使館（日・ポーランド国交樹立100周年認定事業）  
協力 在ハンガリー日本国大使館（日・ハンガリー外交関係開設150周年認定事業）  
ヨージェフ・アッティラ劇場  
株式会社ビジュアル・フォーカロア

出演 上町法印神楽  
高橋 啓一、酒井 政隆、高橋 千壽、佐々木 郁夫、  
今野 真一郎、佐藤 秀巳、及川 慎、佐藤 大夢、及川 竜  
交流セッション解説担当: 千葉 博幸

黒森神楽  
松本 文雄、上坂 良信、畠山 俊良、田中 大喜、  
信夫 健太、平野 智、石崎 泰成、田川 尚樹  
交流セッション解説担当、事務局業務: 假屋 雄一郎

音響・テクニカル統括 梶野 泰範（ステージマインド株）  
舞台監督 渡部 淳一、高野 洋  
照明 菅原 渉吾  
記録 井田 裕基（P26-33撮影）

企画制作協力 神田 竜浩  
解説文執筆・編集 國田 喬  
英語翻訳 Aya Ogawa  
ヴィジュアル・デザイン 北川 正（Kitagawa Design Office）

国際交流基金担当（企画制作） 前田 佳子、豊田 はるな

